



第42回「少年の主張京都府大会」

講 評

京都府教育委員会の柳澤でございます。

まずは、発表者の皆さん、本当にお疲れさまでした。皆さんは、府内各地から寄せられた多くの作文の中から、1次審査、2次審査を経て、この京都府大会の代表に選ばれました。このことは、高く評価されますし、府大会の舞台に立った自分に、自信と誇りをもってください。

中学生の皆さんの主張には、友達、家族、学校生活、命、思春期の心の葛藤など、時代を越えても変わらないテーマがありますが、その切り込み口や着眼点には、時代の特徴が反映されています。一方で、社会の変化を反映する、例えば情報化社会と関連付けられるテーマが近年増えつつあります。また、今年については、新型コロナウイルス感染症の拡大とその予防の中で、感じたことや考えたことをテーマとする主張が見られました。

テーマやそのテーマをとらえる視点に違いはあるけれども、中学生の時期というのは、自分の生き方や社会への関心が高まり、そのあるべき姿を模索し、自分の考えとしてまとめ、提言・提案をしようとする意欲が高まってくる時期という点では共通しています。

実は、このことは、今回の審査にも関係しています。主張の展開や話の内容が論理的で安定しているかはもちろんのこと、発表に中学生としての鋭い感性、みずみずしい感性がみられるのか、また、個人の体験だけを縷々述べるのではなく、提案や意見を社会的、一般的なものとして広めようとするアイデアがあるのかもポイントになりました。

審査委員が作文を読むという形式ではなく、発表を聴くというスタイルでの審査でしたので、「説得力のある話し方であるか」や、「聴き手にとって印象に残る発表であるか」も審査の大きなポイントになりました。

その中で、京都府知事賞を受賞された白岩さん、本当におめでとうでございます。『二つの祖国の間で考える』の主張の中で述べられた、「身近なコミュニケーションを第一歩とした」という提言、しっかりと受け止めさせていただきました。

また、賞の名前は異なろうとも、本日のどの発表も質が高く、審査員一同、一人一人の心からの思いをしっかりと受け止めさせていただきました。

発表者の皆さん。皆さんの考えや思いは、すぐに実現・実行できるとは限らないことと思います。焦らなくても結構です。日常生活の中で、それがにじみ出るようなものであってほしいと私は願っています。

保護者の皆様、学校やPTAの関係者の皆様、本日の大会の様子や一人一人の発表にみられたよさを御家庭で、学校で、あるいは地域の中で話題にし、その内容を発表者にお伝えいただければと思います。そのメッセージは、発表者にとって私の講評よりもずっと価値あるものになると考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、落ち着いたある、適度な緊張感のもとで運得にあたられた司会のお二人の中学生と事務局の皆様にご挨拶申し上げます。以上で、私の講評を終わらせていただきます。

京都府教育庁指導部学校教育課

首席総括指導主事 柳澤 彰 紀